TS（トータル・サティスファクション）を目指して⑬

視野の広い「親切心」を大切に

校長室担当より

「三方よし」。この言葉、元は近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」という心構えをまとめたものと言われています。この「三方よし」の提唱者である、廣池千九郎に次のようなエピソードがあります。

昭和４年、千九郎が講演に向かう途中、山陽線の脱線事故で列車が止まってしまいました。その先 15 キロの場所にある駅前の旅館での講演を予定した千九郎一行は、駅前で残っていた１台のタクシーに頼み、２０円で契約しました。そしてタクシーが出発しようとしたときに、長崎で重要な任務があるという男性と、親が危篤で急いでいる女子学生が駆けてきて、同乗を希望しました。二人とも先を急ぐ事情があり、それを聞いた千九郎の随行員は親切心から快諾しました。その時に、千九郎は「ちょっと待ちなさい。」と言って、同乗を希望する二人にこう言いました。

「私たちは目的地まで、３人で 20 円という契約をしました。しかし、あなた方２人が加われば、その分ガソリンが余計にいるでしょうし、タイヤも傷むでしょう。それでは運転手さんが気の毒だから、私たちもあなた方も全員、１人５円ずつ出すことにしませんか。」つまり、５人で合わせて 25 円を支払うことにすれば、運転手は当初の契約より５円収入が増えるというわけです。実は、そこには「同乗を頼んできた人たちだって、多少なりとも自分のお金を出したほうが気兼ねなく乗っていけるだろう」という千九郎の配慮もありました。廣池たちの一行も、同乗者が増えることで少々窮屈な思いはするでしょうが、３人で 15 円ということなら、当初の予定より５円安く済むのです。種明かしが済むと、廣池はこう言いました。「これで三方、どちらもよいことになるでしょう。」

自分が親切心を発揮することで、相手が助かる。それは「道徳的な行為」といえるでしょう。しかし、その行為の影響を受ける「自分と相手以外の第三者」の存在を見落としていないかということも考える必要があります。ここでいう「第三者」とは、このエピソードに出てくるタク

シーの運転手のように、顔の見える相手ばかりとは限りません。広くとらえるなら、それは私たちが生きる社会全体ともいうことができます。

この「三方よし」の考え方と意を同じくして、４月１日からずっとお伝えしているとおり、本校は「トータル・サティスファクションの実現」をその目的にしています。この学校の教育活動を通じて、児童生徒、保護者、教職員、出入りされる業者の皆様、地域の皆様を含め、どれだけたくさんの人々を幸福にできるかを最上位のテーマにしている学校です。個人の判断による親切心が、学校全体あるいは社会全体の幸福に大きな影響を及ぼすことがあります。常に視野の広いトータルな考え方で、いい学校を創りましょう、一緒に。（令和３年１２月８日）

本校教職員として目指す方向性（確認）

※４月１日にお願いしたこと

１　トータル・サティスファクションの実現

２　学びに向かう力をもつモデルを率先垂範

３　対話とパートナーシップに基づく行動

４　全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現

５　「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の考えを戒める